

■エッセイ

開館30周年に寄せて

館長 菊池 慧



岩手県立博物館は、昭和55年(1980)の開館から今年で30周年を迎えることとなりました。記録を見ますと、当館は「郷土に対する知識と理解を深め、未来の岩手がもつ可能性を認識し、教育、学術、文化の発展と新しい郷土を築く県民の意欲の高揚に寄与する」目的で県制百年記念事業として建設されたとあります。

折しも開館前年にあたる1979年に総理府が行なった『国民生活に関する世論調査』によりますと、半数を超える人たちが「物質的にある程度豊になったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活することに重きをおきたい」と考える時代を迎えていたことがわかります。こうした思潮の中で、学術文化に対する県民の関心はとみに高まりを見せていたことは想像に難くありません。

偉容堂々とした博物館が竣工し歓喜のうちに開館を迎えた10月5日は、朝3時にやって来た中学生を先頭に開館時間の9時30分には長蛇の列となって終日賑わいを呈したと伝えています。11月末日までの入館者は83,676人に達し、多くの県民が博物館の完成をどんなに待ち望んでいたかがしのばれます。

改めまして、博物館建設のためにご努力いただきました皆さま方の、時代の潮

流を読み県民の思いを酌んだ英断とご尽力に深甚なる敬意を表したいと思いません。

以来、私たちは博物館としての役割を着実に進め、社会の変化や県民の要望にそう活動を充実させて参りました。そうした成果が認められ

て平成9年には文化庁から「公開承認施設」としての指定を受け、国宝・重要文化財等の公開展示が容易となり、平成17年の『義経展～源氏・平氏・奥州藤原氏の秘宝～』では国宝「平家納経 法華経」(厳島神社蔵)などの価値の高い優れた文化財を、また、昨年の『野生動物と生きる～岩手のシカとクマ～』展では、すでに絶滅し世界中で4体しか現存しない二ホンオオカミの剥製標本の一つ(東京大学農学部蔵)をご覧いただいたところです。収蔵資料は20万点を数えます。

しかし、この30年間の内外の情勢変化は大きく、博物館をとりまく環境にも変動がみられ、新たな対応が迫られています。

学術、科学の大きな進歩によって、資料のより精確な把握ができるようになるとともに、斬新でわかりやすい展示の方法などが可能となりました。一方、経済不況等による財政悪化は文化政策にも波及し、なかには満足に展示ができない博物館が散見されるようになりました。「コンクリートから人へ」の流れは自然のものとなりつつあります。格差の拡大や人々のもつ価値観の多様さは個に即した対応を必要とし、急速に進む少子高齢化のなかでは、技と知的財産の継承を確か

なものにしなければなりません。

こうした状況は、今日的な次元から博物館の存在意義を見つめ直し、「博物館とは何か」「何ができるか」「どうあればよいか」を問いかけているように思います。これは博物館の不易と流行を明らかにすることもでもあります。

博物館にとっての不易とは、人類と地球の遺産を記録、保存し、文化を創造するという役割を指します。モノ(資料)の収集から出発し、グローバルな視点に立った調査研究に基づいて資料の価値を見いだしていく、この一連の活動こそが博物館の土台となるものです。この土台を強固にしたいと思えます。そのためには調査研究に邁進できる環境を整えることが急務です。

流行は、今後の課題やニーズに対応するものといえます。学びの中にアメニティ(楽しさ・快適さ)をどう盛り込むかは、重要なポイントです。それには触察、参加体験できる新しい展示手法を取り入れることなどを進めていかなければなりません。ひとり一人の学習の欲求に応える態勢づくりも不可欠です。その一つに資料情報をデジタル化・データベース化して館ホームページに載せ、そこから必要な情報を引き出して活用していただけるよう作業を進めています。また、共生は時代のキーワードでもありますが、他館や関係機関、博物館を支えてくださる「友の会」や研究協力員、地域の方々とのネットワークを築いていくことも大切です。

これを機に、「果たすべき役割と望ましいあり方を真摯に追求し、働きかけ行動する博物館、開かれ親しまれる博物館を目指す」と謳った博物館創建の理念を具体化し、実現していく決意です。一層のご支援をお願いいたします。